

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024. 9



令和6年9月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第9号

No.796

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二四年 九月号 (通巻七九六号)

◇シルクロード・カフェ ———— 【責任編集】 木村文子 40

■鑑賞・三好直太の歌 14 (鑑) 久我田鶴子 55

■遊覧寄港 (還暦の恋) 湯浅勢津子 42

■歌壇月旦 西堤啓子 43

短歌そして結社

■七月号作品批評 60

A……………奥田陽子・大浪美雪

深井喜久代・さとうちえこ

B……………酒井 牧・甲田啓子

C……………上林節江

オリーブ集……………永田進一

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

最近の歌誌より (編集部) 80

クリップ……………81 神田通信……………82

写真歌合わせ・作品募集……………表3

◇今月の二十首詠……………立葵 磯田ひさ子 2

■作品A 養学登志子・横田敏子他 4

A 山岸時子他 18

B やまもとしず他 44

C 湯浅勢津子他 56

A 米栖万佐子他 68

■オリーブ集 高橋啓子・田中富子他 34

◇今月の二人 柴田紀子・田端典子 14

私と短歌との出会い (265) 中村恭子 17

■〈第一歌集を読む〉18 石塚貴美恵 28

近藤良子歌集『花霞』

— 父を追い求めて— 菅野順子 32

◇秋のアンソロジー〈秋三昧〉 岩里周英 30

東京歌会 報告

菅野順子 32

## 立 葵

磯田ひさ子

仲見世の狭き路上に外国語飛び交ふ浅草われの住む街

外国の観光地巡る心地せりゴンジャン フーシオンことば天降りて

仕舞屋の並びし横丁消え失せて立ち食ひの店ひしめく令和

コロナ禍をくぐりしこその賑はひと思へばむべなりと呑む

われなりの仁義を切つてすみません通して下さいと言ひつつ歩む

エトランゼといへばはるかな夢を呼ぶインバウンドは少しく尖る

人間の寿命は百二十年として四万六千日になるとふ

ほほづき市に一日詣つれば一生の四万六千日の加護とぞ

昭和二十二年生まれ。  
森の会所員。  
歌集に「狼若」「忍る」「ヒヤシンス」  
他がある。

浅草寺の境内朱色に染めながらほほづきの鉢つきつき並ぶ

釣つりしめ忍軒しのぶに吊るして猛暑日の浅草の熱を鎮めまゐらす

にんげんの暮したふとし鉢植ゑの草花路地より路地に連ねて

浅草は子らのふるさとわれ逝けばわがふるさとはおぼろとならむ

嫁よめきし日父の言ひたり一族の代表と思ひ力尽くせと

嫁の任重き遠き日凌ちちははぎたり常に父母を背中に感じ

浅草に半世紀住みやうやくにわれは浅草の人になりゆく

相続を終へしばかりにわが死後の二次相続を言ふ輩あり

節税の提案をしに通ひ来る銀行員の善意うとまし

手にとりてしみじみと見る新企画「おひとりさま」の旅行案内

一周忌過ぎたどり着く 若きらのじやまをしないで じやまにならずに

立葵の花がてつぺんまで咲きぬもうすぐ梅雨が明けると告げる

## 作品

A

## 養学登志子

「マゴノテ」

・ 竣

何時か誰かにもらった覚えの「マゴノテ」とうとどこかに仕舞ってあるはず何処か  
あやこやと言われて飲みし新薬の副作用らし痒しかゆしよ

湯上りに軟膏をぬる全身のビリビリほんの少しのあいだ

こんなときなでられる手のあるならば詮無き願いはりばりばり

一生に使うことなど思いもせず あらぬところに立ってた筆立

とどくとどく痒い処に爪よりも力入れてもやさし爪より

中筆の太さの持ち手が鉛色に竹独特の柄など浮き出で

## 横田敏子

産声

・ 福

夏帽子目深く歩むポストまで梅雨の合間の陽差し鋭し

ひんがしへ雲の流れの速くして吹き荒ぶ風の姿見えくる

薔薇咲けば薔薇を詠えり紫陽花の咲けば紫陽花今年も詠う

スプーンにてザクザク削り食む水菓バイナップルの味広がりぬ

夫のために付けし手摺に馴染みゆくいつしかわれも八十路を過ぎて

七夕の午後のメールに届きたる初曾孫誕生の動画の産声

待ちわびし曾孫の産声元氣良かった嬉しくて涙にじみ来

## 山下雅子

朝

・ 晋

くねりつつ習志野原をゆく車輛のひびき明るしつゆ晴れの朝

爪切るは朝の慣わし縁起かつく母の名残りの今に続けり

朝の爪ばちばち切りぬ九十年のいのちのかけら変らずにあり

伐採され露な枝に残る葉を揺らし濡らして荒るる朝なり

庭一面ねじ花咲かせしS夫人の笑顔あらわる空屋の庭に

ひさびさの雨にあじさいアガパンサスしっとりたたうる花の色合い

電子レンジの加熱に萎縮するパンよわれの脳ちんちんのふともよぎりぬ

## 山野幸司

雨

・ 沖

トラックと横並び飛ぶ揚羽蝶梅雨の晴れ間の空の一点

雨の中除草機を押す株の間にひょっこり現るお嬢蛙が

足からむ田んぼの土を蹴りながら今日を押せ押せ除草機の歌

青春の覚えのごときチェロの音過去は再び帰らぬものよ

われが手に握り締めたる百円の硬貨自動精米十キロを吐く

君の声電話の先に温かくわが暗き潤線なす線

君が過去知らざり過ぎし半世紀地球は無言唯めぐるだけ

山本 孟

バス降りて

・大

バス降りて傘さすまでを樹雨に濡れ大雨の中分け入って行く  
駅前の本屋閉店後の店ドラッグストアよく利用する  
AIにものを言わせる人間のよい知恵悪知恵地球を席巻  
浮世絵師高い富士山鋭角に 波から宿場から頂上見せる  
風のない若木がひどくゆれている葉陰に数羽の雀が憩う  
ニューイヤークンサートの全曲暗譜指揮テレビは映す小澤の眼力  
敏深くさんばら髪の小澤指揮サイトウキネン髪かき上げ終る

磯田 ひさ子

ねぢれつつ

・森

とげとげの手強きアガベの株分けは当りを付けて真二つに斬る  
何もかも過保護になりぬ植物に細菌防ぐくすりを塗りに  
栄養剤 手 日除け傘 幾重にも守られ白き牡丹咲きたり  
うす紙を束ねしごとき牡丹の白玉獅子のかすかに震ふ  
ビル風に揉まるる草を抜きん出ていつとしもなく振花の咲く  
ねぢれつつ空をめざせる振花のねぢれたくまし風に揺るがず  
うす紅の小花を綴る振花の群れず揺るがず唯我独尊

市原 やよひ

梅

・萬

店先に青梅並び始めたり里の梅の木庭の片隅  
梅干に馴れたる頃に梅漬の話していたふるさとと  
梅漬は父の好物梅を揉む手元のふとも浮かび来る昼  
毎朝のお茶のお供の赤き梅満足気なる父の顔あり  
カリカリと音する程の梅漬はいつしか遠しふるさとと又  
「おばあちゃんはその」示されし席に着きながらそと後ろを振り向いている  
遠くなり又近くなる夫の影あじさいまあるくなりまた

梅本 武義

極楽の花

・羊

極楽の花を咲かせて愛でるとの翁の連根今年もいたたく  
夜明け前息子の出勤のエンジン音響き残すこと思いつつ聞く  
大雨と猛暑の予想聞く入梅病の一つ増えて老いゆく  
返礼に菓子多しよ糖尿の我には毒が妻の好物  
平穩に終るか今日も故障には対処出来ない物に囲まれ  
鳥小屋を囲みて吠える野良犬に似たり台湾包圍の演習  
民主主義国家の存続しておれば天安門は史実に残る

大 浪 美 雪

春 蟬

・森

麦秋の関東平野を突つ切つて列車は一路浅間をめざす  
ひなくもり碓氷峠をトンネルに越え緑まぶしき軽井沢に立つ  
雲場池に迎へくるるは春蟬か細くも高き声を響かす  
草枕旅にあれば摘まずゆく山路、三葉、薊の新芽  
池巡るこみちを覆ふいろはもみち萌え初めし葉の逆光に透く  
落とされし所で芽を出すほかはなく朴の木、楓、まむし草生ゆ  
容れ物はバルブに替はり軽くなる峠の釜飯うまさ変らず

奥 田 陽 子

草刈機

・羊

終日を草刈機の音めぐりいて梅雨の晴れ間の空を重くす  
草刈機に巻き込まれたるは可哀そう藪萱草を摘みて帰るぬ  
雨の日の艶を払えよ川べりに藪萱草は顔あげて咲く  
除草作業終わりに近くたかだかと草持ちあげてアームの運ぶ  
さっぱりと刈られてしまし片隅に藪萱草のわずかに咲くも  
咳聞きて寝がたかりし夜の明けに夫の寝息のとのうを知る  
受けたくなき受けさせたくなき検査なれど入りゆく背をただに見送る

小野 雅子

公園

・羊

桐の花を今年は見ずにすこしたと公園に来て惜しみ樹を見る  
六月の公園の樹の中で聞くまぎれもあらぬうぐひすの声  
あした咲き夕べには散る夏椿 土に落ちてても白きその花  
花の四季に何してゐたとわが生活おもへどこれといふものなく  
寿命にも寿命のあるといふ落語 水売りといふ生活もありき  
ピスタチオ色のＴシャツ梅雨の日に明日着ようとして考へてゐる  
黄色ではなく緑でもないシャツを明日着るためハンガーにかける

神田 鈴子

胡蝶蘭

・大

あざやかに紫陽花の青咲き満ちて夫の回忌を告ぐる水無月  
ウインドウに映る姿に背を正し踏みしめ歩む雨後の坂道  
弟の思はぬ入院伝へ来る電話に胸の鼓動が高し  
お互ひに年を重ねしあけくれを心して生きむ明日に向かひて  
思はざる花のプレゼントにおどろきぬ輝き放つ白き胡蝶蘭  
わが家には不似合ひなれど大きな園にこもれる人のやさしさに触る  
来る年も再来年も大切にはぐくみゆきて花を咲かせむ

上林 節江

多賀城行

・湾

大輪に負けず原種の小アヤマは古跡の石のかたわらに濃し  
野生種も不明種の株も護られてあやめの里の風にさゆるく  
この丘をのほれば壺のいしぶみと見あげる先に天竺の文字  
弟に前後まもられる坂海と古代の風入り交じる  
従わぬ心の民への威圧とも朱の南門のいかめしきかな

「みちのく」も「奥州」さえも蔑称と抗いしかどいつか馴れ付く  
泣き言を是とせぬ母に育てられ気づけばわれもみちのくの母

菊地 栄子

五月

・海

母ならば「あつべとつべ」と笑うだろう介護体操サポーター終える  
庭石菖白き花弁をまたく春すでにさつきの苔ふくらむ  
沢山の眼に見られる心地する八重の山吹沿道を占む  
「いい夜だった」とささやける声起き出でて雲なき天の弦月見上ぐ  
新緑が美しと言う妹よ思い同じに五月近づく  
書齋より落ちる押し葉のクローバーかかる思い出も薄らぎにけり  
八十年代に歳を重ねて思い知るあの頃の上司大方はなき

草刈 十郎

花筏

・世

いつも会ふ人の名さへも浮かびこず長寿の道の諸行は無常  
カーテンを漏るる光と囁りのなかの目覚めのさはやかなりし  
三步の橋かかる小川の花筏人のうはさを乗せて流るる  
ページをばめくればかびの匂ひしてまだ若かりしアルバムの母  
まつすぐに伸びることのみ曲ることアスパラガスは許されざりし  
禿頭の人の雅気なほ枯れずるて人笑はするけふ四月馬鹿  
花散らす風強き日の春障子木々の影絵の揺れ止まざりし

河野 繁子

九輪草

・雁

ポッピービリ・ポッピービリ・と点滴朝の光に落ちる  
つながれて点滴棒を連れ歩きときに忘れて振り返り取る  
二時間ごと看護師見まわる午前二時片手をあげて無事を知らせる  
人間の胎児にひととき水掻きを備える不思議がめぐる天井  
転移なく五年は保証とお墨付き患者にやさしまだ若き医師  
「お帰り」と我を迎える九輪草紅紫の玄関の鉢  
軒ではなく不如帰鳴く里にやっど帰りにて心を癒す



小林能子

「お山が燃える」

・羊

夕焼けに「お山が燃える」と幼らは唄ひ案ずるカラスの子ども  
大変だ 「お山が焼ける」きつとあの子鳥のある家もまる焼け  
夕焼けに「お山が火事」と群れて啼くカラスは生まれた山を忘れず  
土岳の天狗に頼む願ひごと 無理かもしれない政治家の嘘  
爺杉とか婆杉に心寄せる人 原発庵伊訴訟原告団に入ると  
武蔵<sup>たけのこ</sup>地命の東征<sup>あづま</sup>茅の原に蝦夷人の赤血川・赤浜伝説  
ペランダにハシボンガラス餌漁りもせねばカラス語に日暮れを和む

近藤栄昭

包む

・虹

笹の葉を三角に折り米をつめ蒸して笹巻き鶴居が豊か  
郵便が届く予定に期待するポストの時間光が明るい  
人混みを押して進んでサッカー台急がされている今日は安売り  
外商で包んだ商品宛先は隅を合わせてピシッと爽やか  
産着の中包まれること分からず手足バタバタ子は逃れたい  
ずれぬようしっかり巻いて中程を紐で縛って腰に弁当  
追いかけて疲れさせて手で包むしばらくそのまま蜥蜴は静か

近藤芳仙

一揆

・信

山迫る青木村とを訪ひて入り日の峰を仰ぎ見てをり  
その昔百姓一揆の五度発つ坂多き村の奥処を踏めり  
山村をかこむがに立つ十観山・子楨<sup>しづな</sup>領・夫神裾の狭しも  
反骨の精神あふるる辞世の句「いさきよく散るや此の世の花ふぶき」  
首謀者の浅之丞なる墓の句碑「散る花はむかし誠の習いかな」  
米納に苦しみ作りし隠し田を山陰にさがす 二百年後に  
川水の流れ激しき河原よ闇に為されし事挙げの計

坂上直美

地藏盆

・天

紙芝居金魚すくいもありしよな昭和の昔地藏盆の日  
小さき寺幼き子らの彝きて何を遊ぶや地藏盆の日  
地藏盆うれしかりしが哀しかりき幼き夏の終わりゆくこと  
幼な子の数少なければ無しという地藏盆のこと滅びてゆくか  
幼な子の生まれざる世の来るか否か 否とぞ思う否とぞ願う  
マンションのエレベーターに乗り合わず生まれしばかりの子と母と  
子も孫も持たざるわれも後の世の人の幸い深く祈らん

坂出裕子

苗

・洛

御自由にお持ち下さいと書かれたる鉢ひとついたたく散歩の婦り  
何なにか知らない苗の植ゑられし鉢を抱きて帰る坂の道  
多分お花の苗なのでせう幾鉢もうまく育つておすそ分けかも  
有難くいたただき帰る鉢ひとつ早速庭に植ゑて楽しむ  
いつもある部屋の窓からよく見える庭先に植ゑて楽しむひとつ  
大空をくれないる色に伸びてゆく夕焼雲を立ちて眺むる  
神様の賜ひし刻かくれなるの夕焼雲に幸をいただく

佐藤道子

思ひ出

・甲

若き日の写真も載れる追悼号泣きたくなれば筆筒にしまふ  
愛用の住所録と日記帳涙こぼれて手提げに入れる  
「よくぞ嫁いでくれました」俳句手帳に書かれてありし  
腰痛も膝痛も気にならざりし夫在る時の私の厨  
白寿まで付き合ひくれし夫のこと有難かりしとこの頃思ふ  
足弱の夫を誘ひて温泉に通ひし幾年楽しかりしよ  
思ひ出の地に旅するは何時のこと四年過ぎても淋しさ募る

## 篠原まり子

ねこじゃらし

・羊

## 関根榮子

半夏生

・埼

遙かなる目を憶い出ず小学校に戦災孤児の友幾人か  
 太陽とカンナの燃える道ありて眞昼眞夏日体が燃える  
 折おりに痛むかいなを宥めつつ省くもよしと家事を取める  
 月あかり微かに届くペランダのハートかずらのもつれ合うさま  
 借りて来た小鳥と遊ぶ気まぐれに疲れて眠る一羽と一人  
 今は亡き師と巡りしは石山寺春浅き日の足早の旅  
 ねこじゃらし揺れるを撫でつつ朝の道今日のひと日を委ねる思い

## 柴田登志恵

青

・天

身の調べ優れぬままに日本海見はるかす山の青を訪ねし  
 海人を護る観音の堂うらに登山道あり青葉木漏れ日  
 単独峰また双峰とかたち変へ海まもる山いつくよりも見ゆ  
 白亜紀の青葉の山の竜王の裔なる蜥蜴小さけれど  
 いただきの光集めて胴揺らし蜥蜴さりゆく木立ちの低し  
 舞鶴湾見おろす山の六月に灯台踞ちるちる無音  
 つややかな蜥蜴は空を飛べねどもいただきにのぞむ海原青き

## 鈴木結志

無の境

・福

うたを詠み見つくすまでの視力得る脳活性の中の育み  
 鉄舟の書の迫力にひき込まれ目は筆となり躍動はじむ  
 うたと書を永久の伴侶といつくしむ筆に技あり書にこころある  
 無の境の筆致ひとしお就なぐさ中古筆の技の流れ味わう  
 永存にうたあり念力遊びあり筆に書芸の美をいつくしむ  
 藤棚式ちらし書きしてわがうたを書の法則にしたがい納む  
 可能性信じて努力何ものもおそれぬ力筆に手習う

梅雨の日々の変化染しむ葉が三枚白く変れば緑にもどる  
 半化粧、片白草の別名あり半夏生の葉の二枚真白し  
 暑さまた湿度の高き水を飲む二日三日日にくたびも  
 夕暮のひまに日記を書きしるすこの先今日は何もなき苦  
 棒アイス一箱買ひし帰り道急に暗みて雲走りゆく  
 紫陽花の山へ行きしはいつならんテレビに映り遠き日甞る  
 余生とはまた老後なる年数とせうや古き写真を整理し思う

## 関根和美

桜島

・埼

「鹿児島に行ってきました」ばばさんに絵葉書出すも間にあわざりき  
 はじめての薩摩の国に見飽かずは桜島なり夕べに朝に  
 電線に列なしならぶ鳥のよう桜島に向き朝の露天湯  
 いまさらにここ王国をうべないぬ山あり海あり群島ももつ  
 旨き鶏・豚に牛肉とれたての魚にしょうちゅうカローリあやうし  
 九年前はばさんじつおさんとスリーショット来年の琵琶湖もきつと言いにしに  
 十年ののちの「地中海」思いみる私の生もまたいかにある

## 高尾恭子

吉野行

・大

山桜しばし散らすな道の辺の地蔵三尊ほんのり紅し  
 村長むらぢやうの手植えし大楠すくすくと緑はぐくむ時の語り部  
 花冷えの吉野よしとぞ駆け抜けるロードバイクは一陣の風  
 効能はひとつでよろし陀羅尼助フルカウントの恋のスキズキ  
 手びねりの鉢に盛られたフキノトウほろりと苦き春の到来  
 カワセミが今年も来ると待ちぼうけ水面をはしる風なお寒し  
 からっぱの袋になった身にひびく深山かそけき法螺の笛の音

高津砂千子

避暑

・風

突然のわれの異変にたじろがず堂堂として子の妻たのもし  
 高速を含めて片道一時間病院への道息子とドライブ  
 はじめての大病院のひろびろと予約表持ち行ったり来たり  
 「この夏は避暑に行くのよひと月半を」友へのメール考えている  
 洗濯は残さず毎日しておかな入院までの二週間あまり  
 顔そりもヘアカットもなし終えて着替すすむ入院準備  
 まちがいを防ぐためにと撮られたる顔写真はも七十八歳

滝田靖子

短冊

・新

眺の浅い眼りの中に来て鳥は誰の死を告げてゐる  
 昨日は郭公今日は鶯が鳴いてゐる六月節操のない鳥たちめ  
 「せんそうとししんがなくなりそうですよ」拙い文字の短冊下がる  
 七夕の短冊に不穏の書かれるて予定調和な未来などなし  
 戦争は無くせるといつ知るだらう無くせぬ無力にいつ気付くのだらう  
 中国のドラマばかりを見て過ごすこんな晴天のお出かけ日和  
 門番のやうに窓辺に昼寝して不法侵入の風に吹かれる

田土成彦

敬神会

・宙

転生の後このあたりノラとしてうろついてゐるわれかも知れず  
 もしかしてゆかりの人か黒猫の親しげな目に見つめられるて  
 八百万の神でも一億民衆が願をかければ対応できぬ  
 塵土のせまき境内白砂の消浄なれば心やすらふ  
 敬神会八百円の集金の年幾たび知らず支払ふ  
 夏祭りの寄付五百円引き換へにいたたく夏越しの小さき護符を  
 ウシとカバと蹄の教で近縁と言はれればそんな気がして眺む

田土才恵

尾瀬ヶ原

・宙

湿原に太き蛙の声聞こゆいつより棲めるこの尾瀬ヶ原  
 水芭蕉春の季節の花という聞けば歌えぬ「夏の思い出」  
 雪残す山肌見せて燧岳にひろがるみどり目に沁みとおる  
 これきりと思ひて歩む山の徑濡るる岩肌油断はならじ  
 すれ違いゆける歩荷の空の背に運びしものの重さを思う  
 ときおりはよろめきながら木道を歩みようやく終点来たり  
 靴紐を緩める指に伝ひ来る尾瀬行き叶いしこの充足感

玉井綾子

不適切

・羊

飛び乗りて吸う息二倍となる背なに「駆け込み乗車はおやめください」  
 町内の計報回覧コロナ禍を経て見なくなる一〇〇歳未満  
 卓上に義母から夫へ書き置きあり鉛筆で行書・縦書き  
 玄関先種々の花咲く鉢植えに挿さる手書きのメモ「とらないで」  
 平成はノートにペンで書いていた、令和はスマホで送る引き継ぎ  
 月曜に配布されてる週予定吾子は普通に金曜に出す  
 不適切と分かっていますニューチューブ画面に流れる「56す」と「4ね」は

中島央子

往きもどる

・森

三寒四温めぐり巡りて川の面光まぶしく水鳥の影  
 振りかへる吾が五月の影法師これで良いのかわれの残生  
 孟宗の茹で筍をたまはりし先鞭しのぼゆ御宿あたり  
 梅雨入りの季の知らせに紫陽花の光増したる藍またピンク  
 草を打ち地を叩きつつ梅雨一日此の世の憂ひ洗ふがごとく  
 思ひきりバランスボールに背を伸ばすまた強くなる六月の雨  
 思ひ出せぬ事の多さに焦りつつ一歩一歩に往きもどりする

## 永田進一

利鎌の月

・山

天皇は猫剣う写真を公開し横尾忠則氏と猫談議とう  
夏休みカナダ遊学とう孫の旅円安日本の悲哀を知るや  
沖繩の辺野古埋め立て基地のなか遺骨三千柱土の中とう  
間伐の林のなかより鶯のひた鳴く夕へ梅雨の晴れ間に  
公園の樹上に利鎌の月出でて薄暗闇に君の面影  
水張田を窓外に見て雲浮かぶ梅雨の晴れ間の快速電車  
歯の治療終えてもの食むこの夕べ味整えり心静かに

## 永塚節子

正夢

・銀

目覚むれば消えゆくものをまざまざと今なお残るあかときの夢  
わが家は随かにこと思いつつも出て来た人はあざ笑うのみ  
番号を打ちては消すこと繰り返す携帯電話の操作が出来ない  
出勤の時間は過ぎぬあたふたと電話かけるも間違うばかり  
あかときの夢は正夢せまり来るおのれの老いを知らしむならん  
今にして諾いておりあの夢は今日の禍事知らせる予兆  
思うさま蔓伸ばしたるくずの葉はざわざわと風に揉まれて

## 仲西正子

蝶

・沖

梅雨の間の賜物ならんほよほと木耳育つ芙蓉の朽ち木  
梅雨晴れのつかのまを鳴く蝉たちの声止む黒雨風の吹く  
引き出しの奥より出だし梅雨明けに母の形見のあっぱば干す  
花柄の母の形見のあっぱば肌触りよし涼しき夜風  
島線香けむりたゆとうオキナワの六月二十三日の涙  
もの言わぬ蝶にてあれど穏やかな空に放てば悠然と舞う  
もの言わぬ蝶よハベル死者たちの魂を伝える戦場の哀れ

## 中村博子

新聞記事

・淀

冷泉家の蔵より発見されし宝 定家直筆の「額注密勘」  
古今集の歌の解釈、言葉の意味今に伝える「古今伝授」や  
冷泉家に見つかる直筆注釈書に歌道の継承「王朝の和歌守」  
熱心な学びの跡を残しし十八世紀の当主・為村  
「やまとうたはひとのころをたねとして……」冷泉為村の研究ノート  
十世紀の勅撰和歌集「古今集」によりて継承されし和歌の道  
和歌の家に伝わりし資料あまたなり古今伝授の神髄伝うる

## 西堤啓子

月読みの人

・天

手負いなれど氣迫の土俵鋭くて若隆景は月読みの人  
A I が難なく奏でてしましそ超絶技巧のリストの調べ  
ひねもすの海のどやかに猫眠る壊したくない暮らしがあつて  
A E D も担架もやさしい人の手の生んだ善 それを踏みにじるもの  
どこかできつと君は帰ってくるどロンアンティーの甘さで待った  
岬は瀛にぐるまれ白いまま海の氣配を感じてみたい  
攻撃がまた始まって月は欠けあそびではない堂々めぐり

## 白子れい

独りぼっち

・洛

梅雨さなかというも太陽煌々と照らして居りぬ樹々のみどりを  
杖に身をゆだねて歩む疏水べり出で会う人の少なき早朝  
六月に入りし朝もホーケキョと鶯の声わが耳うたがう  
父母逝きて住む人のなき故郷の庭を紫陽花彩りていん  
大きな花かけ紫陽花咲く庭にもどりてみたきと此のころ切に  
ゆるやかな流れと思うも水に浮く木の葉は吾を追い越してゆく  
誕生日くれば九十七歳に 何時まで生くるか独りぼっちで

## 浜谷 久子

この夏

・地

桑の実を摘む散歩道片手ほど 季節がわたしを立ち止まらせる  
終活だと言ひ合い 高校同窓会六十年ぶりは三人だけの  
文化祭創作劇の古代ローマ教室生成りのカーテン衣装に  
同窓会クラス全体会わぬまま六十年まだこれからもなお  
場所日時は貴女の都合で決めるよう店の手配は任せての報  
ひと言の賀状のみの六十年語り合える日何を語ろう  
たつぷりの互みの歳月引つ提げて会おうこの夏升麻花かせ

## 楡垣美保子

少年

・昴

燈籠の二尺の丈と背くらへ切りつめられし庭のしゃくなげ  
つくばいに揺るる木洩れ日よるこぶや赤きほうふら身をよじりつつ  
少年の目覚めて門をでるまでのたんたんと言をとおす思春期  
少年の定期試験は終わりたり聞きなれぬ曲シャウトする声  
理由なくじゃんけんを迫る少年にテンポのあわぬグー返したり  
誕生日花の代わりに苔玉を息子に贈り水遣るは母  
店先の木箱にふたつ夕顔の苗売れのこり蔓ゆれており

## 福田 庸子

水無月の森

・今

朽ち葉積む沢よりくだりくる水の沁みる春の音時の道に  
水無月の花に惑へる日日なるや白が刺さりぬ身の内までも  
山法師花を減らせど水無月の森に冴えゆく亡き人の影  
日のささぬ土に増す花楚楚たるも外来種なりアネモネカナデンス  
いつのまに根つきし株よ水無月の空を吸ひこみ白をふりまく  
温暖化を生きのびる術の先取りと荒地を這ひて昼顔の花  
人間は生き延びらるるや食糧難の予測を余所に爆食のメデア

## 藤田美智子

眼

・新

拒み来たるひとの病を知りてより心騒ぎぬ梅雨入り近し  
くぼみたる眼に心吸はれゆく病篤しと聞きて見舞へば  
余命宣告されたる君のわれを見る眼小さく小さくなりゆく  
別れの日がさう遠からず来ることを思ひみざりき梅雨に入りたり  
交はりを断ちきたる日々を巻き戻すことは叶はず真夜を覚めるる  
いつそ大げんくわすればよかつた溜めきたるものを今さら捨てやうもない  
隔たりてゐる間に何があつたのか悲しみよりも悔しさが湧く

## 藤森 巳行

虫も殺さず

・銀

地中海の友との飲談盛り上がり焼酎ロックおかはり四杯  
松浦さん、やよひさんとの出会ひより六十二年不思議なる縁  
金払ふ我よりケーキをチョイスした孫褒めてゐる妻の母の日  
理髪店の順番待ちの客たちはみんな黙つてスマホ見てゐる  
初恋は遠くなりたりおもひ出づる砂山の無き埼玉に住む  
殺虫剤使はぬ我はいい男虫も殺さず虫もつかない  
炊飯器ご飯ができたよタリタリラお知らせメロディータリタリラ

## 本元由美子

農の尊厳

・岡

梅雨晴れの日差しは僅か十葉を干せば香りの著くだよふ  
夜も更けて篠突く雨に物想ふメールにあらで手紙を友に  
谷水を引きて作れる稲田なれば雨あし強き夜も夫は見まはる  
亡き父は兼業農家にしあれば黎明に出で田打ちたりけり  
かきろひの立つ野に鎌を振る父に朝飯告ぐるは幼かりしわれ  
玉苗の苗代に座り苗をとる父に負けじと意地つ張りる吾  
耕作を放棄せし田の草刈りは梅雨の晴れ間のうだる暑さにて

## 牧 雄彦

賤ヶ岳

・大

古戰場賤ヶ岳を登りゆく新緑のかけ揺れる徑を  
子とふたり一歩づつを踏みしめて賤ヶ岳の頂き目指す  
杉の木のおはひに見ゆるみづうみの皺波ひかり昼たけにけり  
まなしたにみどりが見ゆるみづうみの皺波ひかり昼たけにけり  
なにながし神秘のいろを漂はず余呉湖を高さ日が照らしめる  
北に余呉、南に琵琶湖を見下ろして五月の山のみどりにむせる  
ほつかりと浮く竹生島とほき日に眺めしこともまぼろしにして

## 松浦 禎子

ある日に

・羊

高山寺の黒き廊より裏山をながめつくせしひと日ありたり  
久しぶりに豪徳寺駅に下り立ちて西福寺通りは今日の道筋  
子の夫婦の家族となりし縁持つハスキー犬はわたしの孫か  
昭和という時代の末をなつかしむたとえは高峰秀子の声も  
少女期のわれを誑しし歌謡曲昭和の一人霧島昇  
ペランダの手すりに止まる鳩一羽はねつころうを遠く見ていつ  
歌会を終えて翌日の薪能「船弁慶」は雨に流るる

## 松本多摩子

約束

・桜

春来れば会いに行きます約束の五月三日に姉入院す  
元氣かと娘に問われれば元氣だと即答できぬ今年のは  
忙しい孫に送れりベカサスのドローンの写真空見上げよと  
雨音がテレビかき消す遅れこし短い梅雨は激しさの増す  
二十年続けし子らの見守りを今年で辞めると決断した日  
ひとり居は淋しくないかと聞く人に無言で頷く少し曖昧に  
棺にはあふれる花とテニスボールわれの最後もかく有りたしと

## 三浦 好博

号位

・銃

りようこさん身罷りしとふ泣きながら知らせ呉るる友に我も号位  
また会はうと言へど高齡三夫婦電車待つ間のしめの語らひ  
共存の主張壊されイスラエルのダニエル・パレンボイムの「運命」  
葉は剣を花は向かうを向いてゐる何を頑張るグラジオラスよ  
料亭にて毎晩飲み食ひしないのに我が家の民主主義にもコスト  
憲法が変へられてしまふ再びの戦後といふはあるのだらうか  
九条を吟詠するは思想的？ああ健三郎が泣くだらう

## 宮本 靖彦

遅梅雨

・愛

遅梅雨の今日降り初めて庭に咲く擬宝珠なまはしの小花蓋にはなやぐ  
さやさやと降る雨音の心地よし猛暑のあとの遅れ梅雨の夜  
長き陽にしをれし胡瓜水やれば見る間にしやんと大葉の開く  
八歳も下の従兄弟の葬にゆく共に遊びし「しあわせ村」過ぎ  
骨肉等古里離れ吾もまた半世紀ぶり祖の墓詣で  
郵便局送金自動の方法を教へてもらふ局員優し  
異常気象も世界の行方も読めぬ世に天皇御夫妻訪英うれし

## 三好 聖三

うれたみ

・伊

わが兵を五千人殺せば落とせると敵攻略の腹案を言う  
兵站を疎かにした報いから餓死病死者の多くありしと  
戦友を殺して食べる兵のいて白骨街道に雨は降りつく  
司令部はなれ合いにしておのずから作戦会議は人情が圧す  
司令部の情態を克く記したる斎藤少尉の手記の悲しみ  
司令部も大本営もほっかぶりしてゆく そうこの困らしく  
問いかけに言葉少なく応えたる斎藤少尉のうれたみを読む

明け早く日暮れは遅く長き日よ短歌のシャワーを浴びねばならぬ  
原稿用紙20冊今日届きたり友よ多にぞ歌を詠みませ

2世代とはイスラエル批判の学生デモ吾のイ国嫌ひとは関はりなくも  
イ国より帰国の人と会食時告げてしまひぬイ国嫌ひを

気候危機とふ紙面見ぬ「変動」を一步進みし危機とは見たり  
平和守るに自民ゆ人を奪はねばならぬまづ一人取る静岡知事選  
糞虫の一枚の葉を引きゆけり一心不乱宿命の如

もとむらしげと

猫

・ そ

わが庭に揺れる木槿の白き花けがれなきまま風に散り落つ  
身籠りし犬を埋めたるそのほとり小手毬ついに枝を枯らしぬ  
あじさいの青濃き庭に染みてゆく母のなみだのごとき露雨  
夕暮れに生家に来れば濡れそぼち我にむかいて歩み来る猫  
百合の花雨にうたれてうつむける視野のはずれに佇む猫よ  
まなき生家に棲みつゝ猫なればそのまなざしに母が映れる  
走り出すバックミラーに映る猫じつと見ているまなざし残る

桃原佳子

忘れぬ

・ 沖

突然に逝かれて一月りようこ様心うつろに暮らしています  
爽やかな「会いたいね」の電話の声あなたの最後の声を忘れず  
夕風にすかし百合の花揺らぎ空に半月早もかかれり  
花散りてコスモスは芽を吹き初むる夜来の雨に木々は息づく  
成長を阻むものなきこの庭にこごぞとばかりに南瓜は繁る  
家籠り電話も鳴らず掛けもせず梅雨日続く部屋に短歌詠む  
七十代何処から見ても媪なり歩きやすく軽い靴履く

白髪のおかつば頭の可憐さにやよひさん立ち否と言ひたり  
ドイツより帰国の足で会場へ疲れを知らぬ福田さんなり  
自作についてマイク向けられ好きな力士若隆景と西堤さん  
これはもうのろけでもあり藤森さん妻との喧嘩をおもしろをかしく  
ああなたの歌ここがいいのよと松浦さん 小野さんの歌またほめてある  
それよりも一首目がいいと言ふときの檜垣さんの声ずしりとひびく  
やさしげな息子したがへ御代田さん次の歌集もよろしくと言ふ

## 新刊紹介

・ 「歌人探訪 挽歌の華」 道浦母都子著

角川書店 二六〇〇円(税別)

角川「短歌」に連載された「挽歌の華」(二〇二一年一月  
号から二〇二三年七月号)を再編集して刊行された一冊。

以前、「地中海」で小野茂樹の回の紹介をしたが、その時に  
触れた「わが肩に頬を埋めしひとあれば」の歌も歌集原本のと  
おりに修正されている。

「短歌を始めて以来、私は多くの歌人を知った。(略)その  
中で、私が育まれ、歌人とは、どう生きるのかを身につけてい  
た気がする。(略)加えて、こんな歌人がいたのか、と自分自  
身が驚き、もつと多くの方に知ってほしい、そんな歌人を紹介  
するのにも、力を入れた。」と、あとがきに書かれている。

## 今月の二人

### 日々のうつろい

柴田 紀子

日めくりをしゅっとめくりて今日にして私の一日動き始まる  
 啓蟄を過ぐれど今朝のこの雪に虫たち二度寝するやもしれぬ  
 朝の戸を開けばたちまち入りくる桜花びら春の香連れて  
 純白の穢れを知らぬ桃の花ながむる吾を浄めて欲しも  
 田植えずむ安積平野に清む水面列なす苗にそよ風やさし  
 鯉のぼり緑の風を孕みつつ釈迦堂川に四百余の泳ぎ  
 糠床の減りたる分を補いて母に習いし味を今なお  
 梅をもぎ予想を超える収穫にうれしさよりも戸惑うばかり  
 梅雨晴れに指を染めつつ紫蘇をもむ紅の色付き願いて漬ける  
 AIにて伝えられたる天気予報 違和感もなく聞き流しおり  
 六十年同じ床屋に通う夫「三代目の手の初刈り」と笑む  
 主逝きて空き家の庭は春らんまん水仙の花あふれ咲きおり  
 はつ夏の陽の射す庭に撒く水の緑の粒が光り飛び散る

深みのある歌作りを

初めは新樹の会に所属しており、藤田美智子グループ長さんはじめ会員の皆様には大変お世話になっておりましたが、コロナ禍による勉強会の休会が続いたため、家から近い福島支社に移籍させていただきました。横田敏子支社長さんをはじめ事務局の伊東ミイ子さん及び会員の皆様に快く受け入れていただいで現在に至っております。

月一回、皆様と顔を合わせての勉強会において、それぞれの意見交換をはじめ文法等を学び、私の唯一の学習の場となっております。

歌の素材は身の周りにたくさんあるにも関わらず、その中から見つけ出すセンスと切り取りに練く、これ等を克服する事が自身への課題でもあります。

また、シルクロードカフェの木村文子店長さんによる毎月の「お題の歌」は、歌歴の浅い私にとってこの上ない学びの場であり、歌に対する温かいコメントを励みに参加させていただいております。

穏やかな気持ちで今の自分と向き合い、深みのある歌作りを目標に精進できたらと考えております。